



新一さんはコーヒーが大好き。「定期的に行く眼科の終わりにコンビニのコーヒーが習慣なんですけど、昨日の診察の後は行かなかったんです。それを今日もぼやいてるんですよ」と苦笑いする二人



(上) 美弥子さんの誕生日を祝って新一さんが書いた絵。小学校高学年頃の作品。「昔から可愛いなって思っていました」と美弥子さん (下) 特殊なマジックで陶器に直接文字を書き、トースターで加熱定着させた作品。商品として販売しています



届けたいのは くくれない日常

【絵と文字作家・古賀新一さん】

Instagramで特徴的な文字や数字、記号が並んだアート作品に出会いました。「shinichi koga」というアカウントでプロフィールには「絵と文字作家」、「自閉症兄の日常」と書かれています。投稿は古賀新一さんの作品の紹介の他、障害の事や過去の出来事、家族の気持ち、日々の一コマまで「まぜこぜ」。運営する妹の馬場美弥子さんと母・古賀禮子さんの思いを聞きました。

取材の2日後、新一さんが通う就労支援事業所を訪れました。午前中は仕事、午後はいろんな活動が行われています。この日は音楽。スタッフから「新一さんのクーパー演奏が始まるよ」と言われ、何のことか分からず見ていると、新一さんの手元に届いたのは長い紙箱。中には使い切った丸くなったクーパーペンシルがたくさん入っています。演奏が始まるとリズムに合わせてジャラジャラとかき混ぜ、曲にアクセントを加えます。

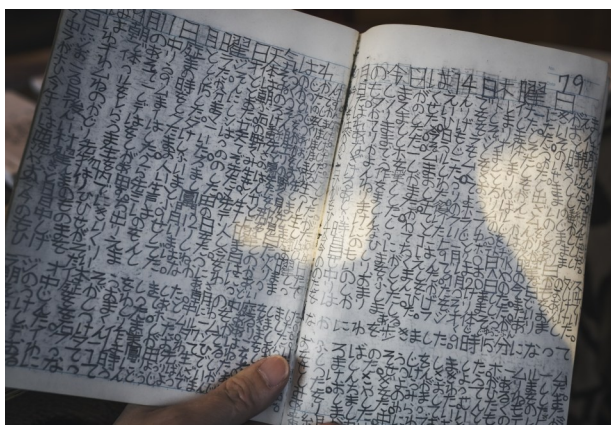
「兄は幼少期から個性的な絵や文字を書いてきたけど、それがアート作品になったのは10年前。前に通っていた事業所が可能性を見い出してくれました。私たちが兄の障害を『特徴』と思えるようになった大きなきっかけです。」

特徴と思える時はきつと来る

当初は「障害者アート」的な打ち出しを意識していた美弥子さん。「知り合いに『障害者という言葉は必要?』と言われ、本当にそうだなと思えました。投稿を見てもらうのに、障害とかアートとか、そんなカテゴリーは関係ないな。例えば老いと障害との違いは先天的か後天的かくらいで、どちらも暮らしの中で起こること。そういう垣根は越えたいんです。だから作品も暮らしも、思いも『まぜこぜ』でいいなって。」

「兄は幼少期から個性的な絵や文字を書いてきたけど、それがアート作品になったのは10年前。前に通っていた事業所が可能性を見い出してくれました。私たちが兄の障害を『特徴』と思えるようになった大きなきっかけです。」と美弥子さんは振り返ります。

撮影のために机に広げた新一さんの作品を眺めながら、禮子さんがぼつりぼつりと話します。「その頃からようやく穏やかに話しかけて、とにかく生活が落ち着かなかった。私ももう気が狂いそうまで、閉じ込めたいと思ってしまったことも何度もありました。母親は生んだ自分を責めながら、「かわいそうな子」と思ってしまうがちだと美弥子さんは感じています。「そういう気持ちで育てると本当にかわいそうな子になる気がします。その子の力を信じるためにも、母親一人に背負わせないようにしないと。」



新一さんの昔の日記。「自閉症という障害の特徴を感じてもらうことも大切。障害者が身内に居ないとどう付き合えばいいか分からないと思うから」と美弥子さんは話します



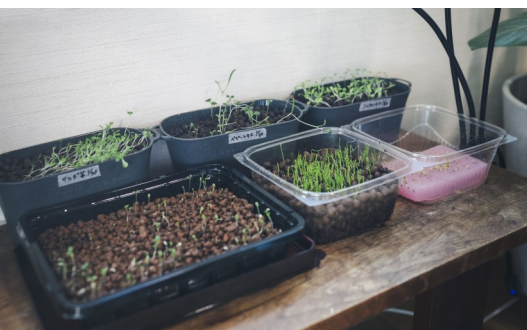
(左) 2月中旬、初めて取材に行くとき新一さんはピアノのレッスン中でした。53歳の新一さんがピアノを始めたのは約3年前。「私も一緒に習っているけど、いつでも成長できるんだと感じますよ」と禮子さん (上) 「コーヒー豆」。作品は自宅各所に

人はいろんな可能性を持っているー

ようやくそう思えるようになった。先が見えないような気持ちになることもあった。閉じ込めてしまいたくなることもあった
もちろん優しい一面もたくさん知っている

楽しんだり、泣いたり、笑ったり、わめいたりしながら、私たちは暮らしてきました。ようやく今、穏やかに暮らしています
そんな日常が誰かの何かの救いになれば

(左から禮子さん、新一さん、美弥子さん)



(上) 事業所での音楽活動の風景 (下) 通っている事業所が就労継続支援B型であるため、新一さんがそれを文字に。事業所の壁に貼られています

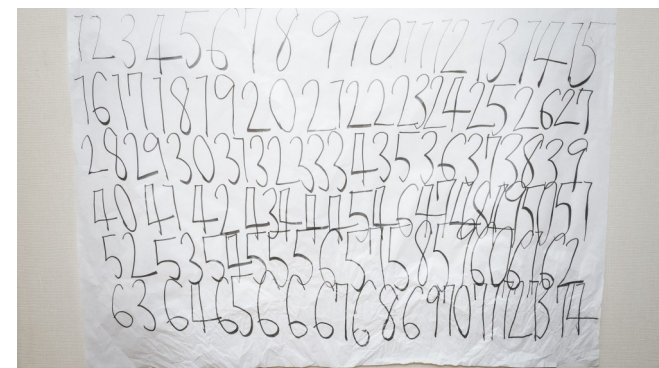


新一さん専用のオリジナル楽器「クービー」。指の力が強い新一さんは弦楽器などは指を怪我するので事業所のスタッフが考案したそう

「新ちゃんとは本当にいろんな苦勞を乗り越えてきました」と禮子さん。「1、2歳のころから新聞の経済欄を眺め、国旗なんか一度見たら覚える。我が家に天才が生まれたかと思いました。その矢先、3歳で自閉症と判明。続けざまに腎盂炎になって死の間際までいきました。中学ではひどいじめに遭い、30代で入所した施設では治療で薬漬けに。生死をさまよいました」。いろんな出来事やその時々々の感情を家族で乗り越え、ようやく新一さんとアートが出会います。「こんなに楽しい活動につながった。今不安な人に今の兄を見てもらって、未来はつらいことばかりじゃないと感じてほしい。だからこそ私たちが向き合った現実も届けないと。楽ではなかったけど、乗り越えてみると意外と大丈夫だったり、良いこともあったりして。言語化は難しいけど、そんな雰囲気、兄と私たちの日常から感じてもらえると嬉しく思います」。

ませこぜの投稿には「くくらない」という思いと「くくれない」という現実が共存しています。それが日常なのだと言うように。

事業所から帰宅し、大好きなコーヒーを一気に飲み干した新一さんに質問しました。「絵や文字を書いている時はどんな気持ちですか。楽しいですか、苦しいですか」。新一さんは私から目をそらしながら「楽しい、うれしい。楽しい、うれしい」。(担当・フトシ)



(上) 新一さんの代表的な作品は文字。表紙写真の背景は花の包み紙に数字を羅列した作品です (右) 新一さんが最近始めた水耕栽培。サラダ菜やベビーレタスに毎朝水をやっています

